

## フランスにおける地域研究の一つの継承

### ——ストラスブール学派の場合——

大 嶽 幸 彦

#### 要 旨

本研究は、フランスにおける地域研究の一般的動向を概観した後、ストラスブール学派における地域研究をマクロ的研究とミクロ的研究との両者に分け、それらの分析を通じてフランスにおける地域研究の一つの継承を明らかにしようと試みたものである。

フランスにおける地域研究の伝統は生き続けており、フランス国内の小地域の研究のみならず西ヨーロッパ、南北アメリカの発展途上国、地中海諸国、中近東、東ヨーロッパとソ連、熱帯や極東とほぼ世界の全域にわたっている。いわば、マクロなスケールの地域研究とミクロなスケールの地域研究とが並存しているといえよう。ストラスブール学派においても、研究対象は同様であるが、主な特徴は次の如く指摘できる。

ストラスブール学派のマクロ的研究は、ゲルマン語圏に関する研究、空間組織ないし地域組織に関する研究、宇宙衛星からの画像を分析した研究、フランス東部地域に関する啓蒙書といった点に特徴がある。ストラスブール学派におけるミクロ的研究も本質的にはマクロ的研究と同様であるが、空間組織、地域組織をより詳細に解明し、さらに歴史的変遷の下にいかに関空間組織が変容してきたかを明らかにしたものといえよう。

#### KEY WORDS

|                    |      |                   |           |
|--------------------|------|-------------------|-----------|
| Area Studies       | 地域研究 | Strasbourg School | ストラスブール学派 |
| Areal Organization | 地域組織 | Scale of Research | 研究のスケール   |

#### 目 次

- 1 は じ め に
- 2 フランスにおける地域研究の主な動向
- 3 ストラスブール学派における地域研究
  - 3.1 マクロ的研究
  - 3.2 ミクロ的研究
- 4 結 び

## 1 はじめに

本稿のテーマは長年あたためてきたものの一つであるが、ストラスブール学派に関する研究資料や著書・論文等を蒐集し始め、読み進めてから15年以上の歳月が過ぎた。その間、本草稿を執筆するのは時期早尚と判断し、少しずつ引き延ばしているうちに、例えば、青木伸好の「地域研究における哲学とその影響<sup>1)</sup>」、米田 巖の「海外地域研究とフィールド・ワークの思想<sup>2)</sup>」、竹内啓一の「地域の概念と地域主義——比較研究、イタリアの場合<sup>3)</sup>」を始めとする地域研究に関する優れた研究が最近相継いで発表され、大きな刺激を受けた。さらに、1984年度日本地理学会香川大会でのシンポジウムの一つに、「地理思想史における伝播・継承および革新——日本を主として——<sup>4)</sup>」が取り上げられ、筆者も座長の一人に選ばれ、地域研究の継承性に関し考察することのあったことも、本稿の執筆を促す動機となった。

従って、本稿は現時点においても文献学的にフランス東部の地域研究を完全に網羅したとは言いが、出来る限り関係の諸文献に目を通し、書き進めながら補筆を繰り返した結果である。その副題をストラスブール学派の場合としたのは、筆者の蒐集した研究資料上の制約を多とするが、フランスの地域研究を中心に論じた青木伸好の前述論稿がストラスブール学派の業績をあまり取り上げていない点に、疑問を抱いたのも理由の一つである。筆者は本論の中で取り上げる R. シュワブの著作「*De la cellule rurale à la région, L'Alsace, 1825~1960* (農村の細胞構造から地域へ、1825年から1960年のアルザス)」の文献解題の中で、その疑問点について既に触れたことがある<sup>5)</sup>。もっとも、ストラスブール学派の地域研究に哲学が不足していると判断されて取り上げる必要がなかったのか、あるいは文献上の単なる制約によるのか否かに関しては、上述の論文の中で言及されていないので、不明のままである。ただ、その後、青木伸好は地域に関する自己の論文を中心にまとめた著書「地域の概念——都市と農村の関係において——<sup>6)</sup>」用いて書き下ろした、第1章、地域概念の問題の中で、ストラスブール学派の E. ジュイヤーと R. シュワブの論文を先頭に引用しながら詳細な論議を進めている点は興味深いことであり、本稿でストラスブール学派の地域研究を取り上げた意義の一つを少なくともも支持するものである。

次に論述してゆく如く、フランスにおける地域研究はかつて程盛んではなくなったが、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの播いた種はフランス周辺部の一つ、東部においても着実に実のある成果を出して来た点を本論の中で少しずつ明らかにしてゆくことを、本研究の目的とした。

## 2 フランスにおける地域研究の主な動向

フランス地理学派の伝統であった地域研究の一連の業績は国家博士論文 *Thèse de Doctorat d'Etat* の出版物でもあったが、いずれも400から600頁になんなんとする膨大な研究書の数々を生み出してきた。ところが、最近10年間の国家博士論文を主に分析すると、フランスではかつての地域研究との断絶が見られる<sup>7)</sup> という。しかしながら、フランスにおける地域研究の伝統は、パンシュメル他の「フランスの地理<sup>8)</sup>」以外に、地域空間の組織に関する研究書にも継

承されている。例えば、最近の優れた地域研究としては、ビガリエの「商業港と沿岸生活<sup>9)</sup>」や、シュワブの「農村的細胞構造から地域へ、1825年から1960年のアルザス」等が挙げられよう。もち論、フランスにおける地域研究が研究書の数において次第に減少してきている点を確認するのにやぶさかではないが、叢書においてはそうでもないといえるのである。例えば、1967年から1975年にかけてはP. ジョルジュの編集の下でマゼラン叢書が刊行され、33冊のうち23冊が世界地理であったし、1972年から1974年にかけてラルース社から、多数のカラー写真を掲げ、叙述も地域地理的な「Découvrir la France (フランスの発見)」が毎週発行された。1976年から1983年にかけては、フラマリオン社から15巻で、各々300~500頁の「現代フランスの地図帳と地理」という叢書が刊行されている。その際、本の内容は地域地理学的手法が主となっている<sup>11)</sup>。

ところで、フランスにおける地域研究の伝統は生き続けており、その研究対象はフランス国内の小地域(ペイ pays<sup>12)</sup>)の研究のみならず、西ヨーロッパ、南北アメリカの発展途上国や地中海諸国、中近東、東ヨーロッパとソ連、熱帯や極東とはほぼ世界の全域にわたっている。いわば、ミクロなスケールの地域研究とマクロなスケールの地域研究とが並存しているといえよう。そこで本稿では、ストラスブール学派における地域研究を考察するに際し、マクロスケールの研究例とミクロスケールの研究例とを能う限り区分し、叙述する方法を採った<sup>13)</sup>。既に度々言及したストラスブール学派という用語の定義に関して一応述べておけば、一般にフランスで学派が本当に存在するか否かに関しては、疑問がない訳ではない。よく知られている如く、フランスでは個人主義が強いため、B. バルビエの述べるように、「フランスの地理学者集団は異質であり、チームや学派の形成は不完全である。しかしながら、大きな傾向がないわけではない<sup>14)</sup>」という見解が、フランスにおける地理学者集団の特質を言い得て妙であるからである。それゆえ、本稿でストラスブール学派という場合、アナル学派、すなわちフランスの社会経済史年報(Annales d'histoire économique et sociale)に結集している研究者集団をアナル学派と呼称している方式を本稿でも踏襲したいと考える。つまり、フランス東部地理学雑誌Revue géographique de l'Estでの活躍を中心とするストラスブール研究者集団の謂である。従って、本稿の分析資料の中心をなすのが、多数の著書の他にフランス東部地理学雑誌掲載論文である点は自ずと明らかであろう。

次に、本稿の主題であるストラスブール学派における地域研究をマクロ的研究、ミクロ的研究との両者に分け、それぞれの研究事例を検討することにした。ここで言うマクロ的地域研究とは国ないし国境にまたがる広範囲の地域を扱った地域研究を指し、ミクロ的地域研究とはペイ pays(小地方)ないし région(地域)と、比較的狭い範囲の地域空間を取り上げた地域研究を指している点を前もって明らかにしておきたい。

### 3 ストラスブール学派における地域研究

ストラスブール学派における地域研究の特質の一つは、ヨーロッパでのフランス東部の位置、ドイツ語方言の一つ、アルザス語を話し理解する研究者の存在からも予想される如く、まずゲルマン語圏に関する研究が挙げられる。そのゲルマン語圏の中央ヨーロッパに関する地域地理学をまとめたH. ノンによれば、フランス東部の研究者の何人かはライン空間や、もっと

広く言えば、ドイツ語圏の専門家となっているという。例えば、メス（メッツ）大のF. レテルやアルザスのR. シュワブ、G. バッケルマン、R. クラインシュマーガー、スイスではJ. L. ピベトー、C. ラッフュスティンなどが主な研究者として挙げられている<sup>15)</sup>。また、ドイツ語圏の地域分析に関しては、次の四つのアプローチが指摘されている<sup>16)</sup>。第一は“ライン空間”のような地域組織の特徴を明らかにすることに対して、第二は国境のような政治構造を考慮することに対して、第三は地域組織のより詳細な諸条件を分析すること、第四は地域組織を豊かにする様々なテーマの研究である。なお、フランス東部地理学雑誌1971年の3～4号は地域分析の研究を特集し、それら掲載論文の研究法に関しては、アンリ・ノンの解説が冒頭にある<sup>17)</sup>。次に、既に述べた順序に従って、マクロ的研究から取り上げてゆくことにしたい。

### 3.1 マクロ的研究

ここでは、代表的な研究例を取り上げつつ、ストラスブール学派におけるマクロ的研究のもつ特徴を把握することに努めたい。しかしながら、ストラスブール学派においても、地域研究の絶対数自体はあまり多くないことを再度指摘しておかなければなるまい。

既にR. スペクランは、ストラスブール大学地域研究研究室に提出された学位論文や修士論文を基に、1948年から1968年にかけてのアルザスに関する地理学研究を展望し、次のように述べている。「この地でも最近の統計に基づく都市地理学研究が次第に多くなり、行政や自然的側面に対する文献がないがしろにされつつあること、しかし、もっと多様な諸問題を扱うことができるモノグラフィーをまとめることが有効である<sup>18)</sup>」と、1960年代の末においてストラスブール学派でも伝統の地域研究が既に減ってきた点に、危惧の念を抱いている。次に、ストラスブール学派の地域研究の代表例と言え、学派の統師ともいべきジュイヤールの大部な「ヨーロッパの南北軸——大空間の地理——<sup>19)</sup>」をまず挙げない訳にはゆかないと思われるので、この著作から見てゆくことにする。

本書は一言でいえば、ライン空間をヨーロッパの南北軸としてとらえ、EC諸国とスイスにおける空間組織の形成に、歴史地理的な考察を加えた上、現在までの分析を試み、最後に総合化した著作である。従って、本書は単にライン空間に関する地域的モノグラフィーにとどまらず、ある空間がどのように変容してきたかのプロセスを、ダイナミックな分析方法で解明しており、地域研究の新機軸を出したものの一つであった。なお、ジュイヤールは1960年から1972年にかけて、様々な雑誌や報告書に寄稿した「地域」の概念に関する論文を、問題提起、方法論、応用の3つに分類して、論文集を出している<sup>20)</sup>。それらの中には、地域に関する定義を試みた意欲的で我が国にも早くから紹介された論稿(Ann. de Géographie 1962)やフランス地理学の地域と地域区分を扱ったもの、西ヨーロッパにおける農村の都市化を論じたものなど、よく知られている反面、われわれの手に入りにくい論文を掲載しているので有難い。

次に、世界的な地形学者の一人、ストラスブール大学のトリカールは宇宙衛星ランドサットから送られて来た画像を基に、1972年10月9日と12月20日のストラスブール・ナンシー・コルマル地域の実地調査を行なっている。雲がかかったり、大気の透明度が不十分なため、画像は鮮明とは言い難いが、起伏と植生、リエアメント、主な水路、都市のアグロメレーション、谷底の草地、レス土壌上の耕地が観察しうる点を詳細に論じている<sup>21)</sup>。

また、クラインシュマーガー他は、1954年から1978年にかけてアルザスで創設された工場の立地を分析し、外国資本が多いこと、中でも近隣の西ドイツ諸地域からもたらされた資本投下

が多いことを明らかにしている。工場規模は既存のものよりも比較的大きく、業種は様々であるが機械製造が多いといえる<sup>22)</sup>。次に、「フランス東部の地域」と題する著作は、《明日のフランス》シリーズ八巻本のうちの一冊であり、東部の大学に勤務するか、かつて教鞭を取っていた5人の著者がフランス東部地域を共著でまとめたものである<sup>23)</sup>。図表や写真を多用しながら、東部地域の概観と諸問題を指摘した後、農業と工業成長、都市網と地域整備をまとめている。その上、フランス東部が伝統的な平衡状態から大きな変革を受けつつある様相を、位置の良さ、農業的使命、都市化、工業化の観点から明らかにしたものである。また、既に言及した「現代フランスの地図帳と地理」叢書の一冊として書かれた「アルザスとロレーヌ（ライン空間のフランス<sup>24)</sup>）」は、両地方について最新のデータと多数のカラー写真を掲載した地域研究書である。さらに、この地域は多国籍地域 *région multinationale*（政治的な国境にとらわれぬ地域で、経済地域の境界と政治的な国境が一致しない場合などに見られる。筆者注）の1つとしても紹介されている。ここはライン空間のフランス部分であり、将来の統一ヨーロッパの核ともなるべき地域でもある。巻末のカラー図も参考となる。

ところで、西ヨーロッパ諸国では、都市網、人口密度、産業、輸送設備等の分析により、《パリ空間》、《ライン空間》と《周辺空間》という三つの地域組織が抽出される<sup>25)</sup>（図1）。

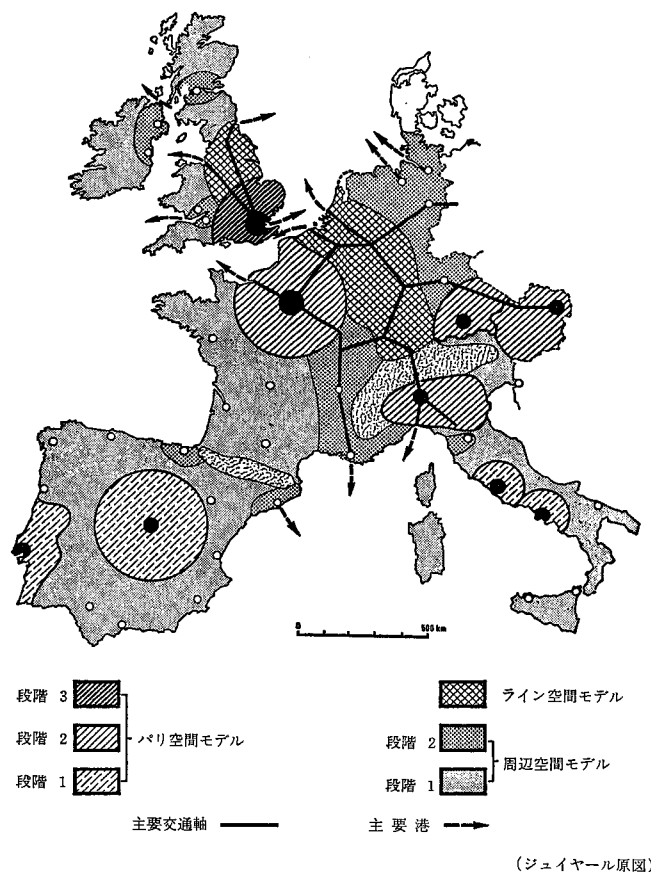


図1 西ヨーロッパにおける等質空間

それらと同様な地域組織に関連するマクロ的研究例としては、以下のものが挙げられてよいだろう。

まず、バッケルマンは西ドイツ連邦における毎日の通勤流動を詳細に分析し、その地域的な組織が都市を中心に、いくつも見られる点を指摘している<sup>26)</sup>。多核的な影響圏が通勤流動の多くの部分を占めているとはいっても、単一核の影響圏も少なくないことが明らかとなった。次に、バイヤーは人口1万から10万程度のフランスの中小都市20以上を取り上げ、都市空間組織の形態に関し、位置の役割、産業と交通の役割を分析しながら比較している<sup>27)</sup>。その結果から、著者はいくつかのタイプの問題と解決方法を提示している。例えば、谷底にある都市と広々とした平野にある都市とでは、空間の問題が異なるし、工業都市か第三次産業の都市のいずれかでも問題は違ってくる。また、都市の牽引力、都市規模、都市成長の差に関しても、同様に異なるのである。

また、アンリ・ノンを室長とするストラスブール大学地域研究研究室のメンバーは、鉄道と陸路による貨物輸送におけるアルザスと、他のフランス各地との結びつきを分析している<sup>28)</sup>。その結果によると、アルザスはロレーヌ、北部地域、パリ地域とセーヌ低地地方と最も結びついていて、アルザスからの400km圏が貨物輸送のかかなりの部分を占めていることがわかる。他方、ライン・ローヌ軸の輸送は比較的少ないといえる。道路輸送に関しては、距離は鉄道ほど重要な要因ではない。しかし、輸送時間の因子は無視できない、等々を明らかにしている。

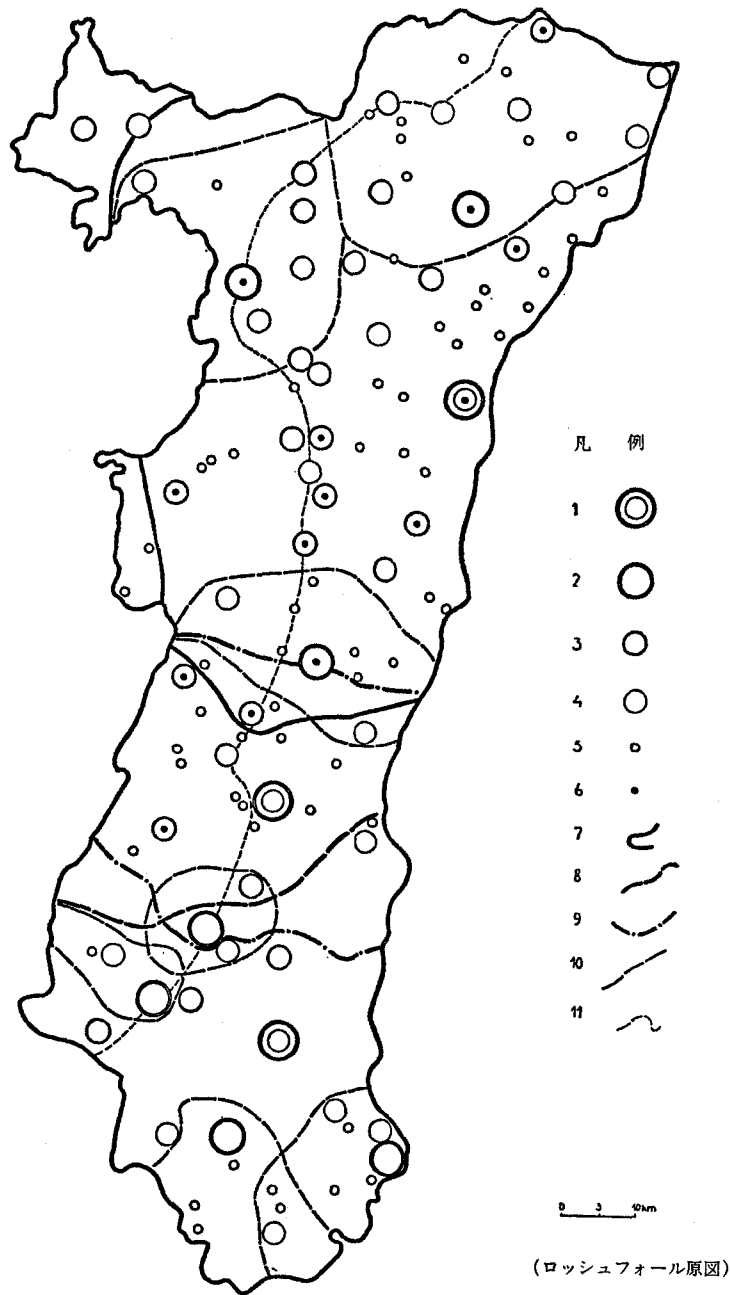
以上みてきたストラスブール学派のマクロ的研究を一言でいえば、ゲルマン語圏に関する研究、空間組織ないし地域組織に関する研究、宇宙衛星からの画像を分析した研究、フランス東部地域に関する啓蒙書といった点に特徴があるといえるのではなかろうか。次に、ミクロ的研究の分析に移りたい。

### 3.2 ミクロ的研究

ここではミクロ的研究を主とするが、マクロ的研究の項に入れにくかったメゾスケールの研究をも併せ取り上げることにしたい。

先に述べた如く、フランスにおける地域研究が、ヴィダル・ド・ラ・ブラージュ以来、フランス学派の伝統といえるものであった点はよく知られている事実であるが、それも様々な地域に関する数々の国家博士論文がもたらしたものであった<sup>29)</sup>。ストラスブール学派に限って言えば、ジュイヤーの国家博士論文「低地アルザス平野における村落生活<sup>30)</sup>」は綿密な論理体系をなし、豊富な研究資料を駆使してアルザスの農村を克明に論述した研究書であり、引用されることの多い著作の一つである。内容は、主に18世紀以降のアルザス平野における村落生活を研究対象とし、伝統的枠組の時代から農村危機の様相へとダイナミックに展開する地域の本質を、多数の資料、統計、古文書を基に精緻な論証で解明したものである。最後には、空間整備を含む政策への提言を行なうなど、過去から現在、将来をも見通す意欲的な著作であり、マクロ的研究の項で検討した空間組織研究への萌芽をなすものである。

ジュイヤーの研究が農村の空間組織に関するものであるとすれば、次に取り上げるロッシュフォールの国家博士論文「アルザスの都市組織<sup>31)</sup>」は文字通り、都市の空間組織に関する研究である。ロッシュフォールは80数枚の大きな図を作成しつつ、アルザスの都市空間の組織について農業、工業、第三次産業における都市の役割を論じ、18世紀中頃以降の都市網の形成を



1. 地域的中心地 2. 地域の副中心地 3. 局地的中心地(第1オーダー) 4. 局地的中心地(第2オーダー) 5. 基礎地域を中心 6. 以上のカテゴリー以外の機能をもつ中心地 7. ストラスプールの影響圏 8. ミュルーズの影響圏 9. コルマルの影響圏 10. 地域の副中心地の影響圏 11. ボージュの山麓線

図2 アルザスにおける都市の階層と影響圏

明らかにしている。最後には、都市のタイプ分けを行ない、大都市、中都市、小都市の影響圏を図示しており、引用されることの多い文献の一つである（図2）。

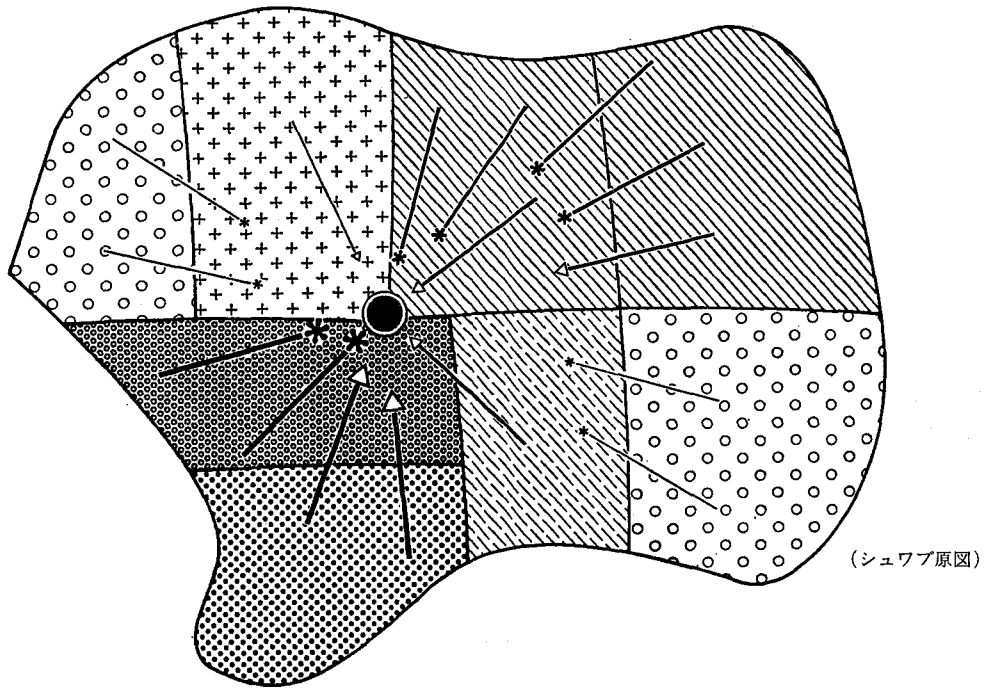
次に、ロラン・シュワブの国家博士論文は、数十年にわたるアルザス研究をまとめたもので、多数の図表を使って綿密な論証が展開されている<sup>32)</sup>。本書は前述のロッシュフォールの都市組織に関するアイディアに富んだ著作<sup>33)</sup>や、ジュイヤーの農村生活に関する実証研究<sup>34)</sup>をさらに発展させて都市と農村を総合化し、両者の相互作用がいかに地域特性を生み出してきたかを、アルザスの例で実証した研究と評価しうる。消えたかに見えるフランス地理学派の一つの伝統、地域研究が、新しい概念、*espace vécu*（生きられる空間）の導入と共に再生し、あるいは存続してきた点を本書は明らかにしてくれる（図3）。また、同じくシュワブは中部アルザス農村の例で、1800年から1970年にかけて農村の人々の社会生活が周囲の世界とは孤立した細胞状の空間的範囲から、次第に大都市を中心にした空間的範囲に組み込まれてゆく過程を明らかにしている<sup>35)</sup>。この過程は社会的均衡の崩壊、工業化現象、コミュニケーション網の発展、都市の牽引によって始まったものである。

ストラスブールという都市の空間組織に関する代表的研究例としては、アンリ・ノンの研究がある<sup>36)</sup>。ノンは非常に詳細に、ストラスブールの都市連合体 *la communauté urbaine de Strasbourg* を叙述している。まず、ストラスブールの現在の様相に影響を与えた地理的位置と歴史が説明されている。次に、人口や経済活動に関する多くの図表を使って、ストラスブールの影響圏の差異が明らかとされる。次いで、都市の空間組織が詳細に叙述され、各カルチュエ（街）、郊外も分析の対象となっている。ちなみに都市連合体が創設されたのは、ストラスブールが空間整備とメトロポリタン郡市としての機能を保持しているからである。ストラスブールと同じくライン川に沿う都市の一つ、マンハイムとの比較研究に関しては、アンドレ・トラバンの研究がある<sup>37)</sup>。トラバンは18世紀から現在におけるライン川中流部のメトロポリタン郡市、ストラスブールとマンハイム＝ルートウィックスハーフェン（マンハイムの対岸都市）を多数の図表で比較し、共にライン川に面していることが今日の発展の基礎となっている点を明らかにし、特にストラスブールの役割を中心に分析している。ストラスブールは1870年以降のドイツ領下に地域的機能を強めたのに対し、第一次世界大戦以後は国際的機能を有するようになった点も明らかにしている。一方、マンハイムは対岸のルートウィックスハーフェンの工業化と併せ、急速に都市成長を遂げた都市である点も論じている。

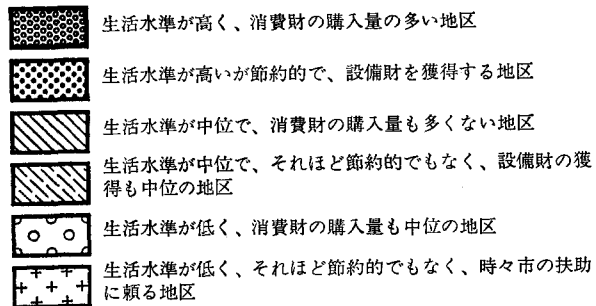
最後に、デコヴィル・ファレの研究は、アルザス平野の東南部にあってライン川沿いの20数ヶ町村を選び、主に1950年代以降の変遷を人口と産業、地域構造の面から分析したものである<sup>38)</sup>。そこは西ドイツ、スイスとの国境地域であり、かつては農村からの人口流出の地域であったが、現在はアルザス大運河の開通に伴い、工業化も進んでいる。本書はハルトと呼ばれる地域の特徴を引き出した地域研究の一つといえる。ストラスブール学派に加えてよいかどうか疑問なしとしないが、筆者もストラスブールの北西、レス土壤丘陵上にあるプロテスタント村・カトリック村の四村を取り上げ、1660年以後の土地台帳、他の資料を現地で読み、土地所有、農業経営、地筆構造等について分析し、通説に誤ったと思われる点を見出し、資料の上から反証したことがある<sup>39)</sup>。併せてアルザス農村の例で、都市・農村関係を論証した<sup>40)</sup>。

以上の如く、ストラスブール学派におけるミクロ的研究も本質的にはマクロ的研究と同様、空間組織、地域組織をより詳細に解明し、さらに歴史の変遷の下にいかに関空間組織が変容して

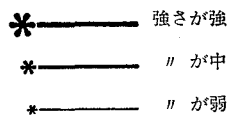




1) 地 区

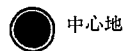
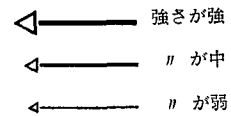


消費財の交換



2) 流 量

設備財の交換



中心地

図 3 機能地域の内部構造図

きたかを解明しているといえよう。

#### 4 結 び

本稿では、フランスにおける地域研究の一般的動向を概観した後、ストラスブール学派における地域研究をマクロ的研究とミクロ的研究との両者に分け、それらの分析を通じてフランスにおける地域研究の一つの継承を明らかにしようと試みてきた。本稿を結ぶにあたり、地域研究の新しい研究方向を次に述べ、ストラスブール学派における今後の地域研究の継承性を論究してみたい。

フランスにおける地域研究への新しい視角の一つを提供したのは、A. Frémont の「La région, espace vécu (地域, 生きられる空間)<sup>41)</sup>」の著書に代表される、地域を生きられる空間という概念を使って説明しようとする立場である。フレモンによれば、「地域は各個人、各人間集団、各社会の生活の大きさを構成する。地域は生きられる空間である。人間から見た地域は、大部分、地理学者のそれと一致する<sup>42)</sup>」という。すなわち、地域空間の知覚と活気の範囲は、輪二輪車とヒッチハイクからボーイング・ジェット機までとかなり異なっているのである<sup>43)</sup>。そして、例としては20世紀初頭における或る職人の地域を説明してゆく。職人にとって、カルチエにおいてこそ大多数の人々を知っており、また、自分も知られている世界なのである。一方、戦争や短期の旅行などで行った遠方の地は、職人にとって所詮別世界であり、日常は意識外の地でもある。そこについて話したり、夢見ることもできるが、生活空間は都市の壁や街路で止まってしまう<sup>44)</sup>。要するに、フレモンの地域研究の斬新さは、地域が相対的観念であって、性別、年令、活動、社会的地位との関係で、個人毎に異なって知覚される点を明らかにした点にあるといえよう。

このフレモンの研究に刺激を受けて、将来のストラスブール学派を背負うロラン・シュワブは本論の中で論じた著作<sup>45)</sup>の中で、新しい研究方向、すなわち生きられる空間という概念を導入して地域研究をまとめたのである。それは三部と結論から成り、そのタイトル名を示せば、次の通りである。すなわち、第一部は移動に伴う都市と農村の相互関係、1825年～1962年におけるアルザスの例、第二部は19世紀初頭における空間の地域組織、強固な内的結束をもつが、それぞれ独立した細胞式構造の卓越さ、第三部は鉄道時代のアルザスの地域組織、空間の組織化に果す都市の役割 (1850～1950)、結論としてはアルザス空間の地域組織の諸要素、いわゆる段階の諸問題、地理的事実の永続性、人間集団の *espace vécu* (生きられる空間)、方法論の反省となっている。ロラン・シュワブの本書をもって、ストラスブール学派の地域研究を継承するものとみたのは、地域概念に関し、新しい知見を加えたこと、研究方法の改善に優れている点にある。

以上の如く、本稿では取り上げた地域研究の内容をあまり性急に一般化・抽象化するのではなく、出来るだけ具体的に述べて、ゲルマン語圏ないしフランスの地域の地理的様相が浮彫りできるようにも試みたつもりである。というのは、まざまざと目に浮かぶよう叙述・説明を厳密に加えてゆく方法こそ、フランスにおける地域研究の伝統を継承するものであったからである。R. ブリュネの述べる如く、「連続体として考えられた地域は生き生きとした現実である<sup>46)</sup>」ゆえからも、フランスにおける地域研究の灯が消え去ることは恐らくないものと思われる。本

論で明らかにした如く、フランスにおける地域研究は絶えず新たな概念・内容を導入しつつ、更新し続けているのである。

本稿脱稿後、西川 治著「人文地理学入門、思想史的考察」東京大学出版会、1985年10月発行を手にした。特に第14章 地域研究の意義と課題は、第2次大戦後における地域研究の進展と地域研究をめぐる諸問題を指摘し、地域研究推進の方策を提言している点で興味をひくが、本論の中で十分に検討する時間的余裕がなかった事を付記しておきたい。

### 注および参考文献

- 1) 青木伸好「地域研究における哲学の影響とその問題」人文地理34巻6号、1982、51～70頁
- 2) 米田 巖「海外地域研究とフィールド・ワークの思想——異文化の黙示録をひもとくために——」人文地理36巻2号、1984、35～55頁
- 3) 竹内啓一「地域概念と地域主義——比較研究、イタリアの場合——」一橋論叢84巻6号、1980、48～55頁
- 4) 竹内啓一・野澤秀樹「地理思想史における伝播・継承および革新——日本を主として——、1984年度秋季学術大会シンポジウム」地理学評論58 (Ser. A) — 2, 1985, 103～112頁
- 5) 大嶽幸彦「文献解題 Roland Schwab: De la cellule rurale à la région, L'Alsace, 1825～1960」人文地理35巻3号、1983、93～94頁
- 6) 青木伸好「地域概念——都市と農村の関係において——」大明堂、1985、343 P.
- 7) P. Estienne 「France: chronique de géographie régionale」, Ann. de Géographie, N° 517, 1984, p. 369
- 8) P. Pinchemel et al. 「La France, Tome 1～2」 Armand Colin, 1980～1981, 744 P.
- 9) A. Vigarié 「Ports de commerce et vie littorale」 Hachette, 1979, 496 P.
- 10) R. Schwab 「De la cellule rurale à la région, L'Alsace 1825～1960」 Éditions Ophrys (Paris), 1980, 518 P.
- 11) いずれの叢書についても、筆者は何冊かを手許に置き、内容を検討した。
- 12) 小さなベイの研究は地誌学の分野に属しており、多くの大衆を感動させるという。前掲 (7) p. 369
- 13) 浮田は人文地理学の研究対象とする人文地域をマクロ (巨視的) とミクロ (微視的) にわけて編集するかたわら、とらえかたのスケールの問題がいかに重要であるかを、とくに地図化と関連させつつ述べている。  
浮田典良編「人文地理学総論、総観地理学講座9」朝倉書店、1984、1～17頁
- 14) B. Barbier et al. 「Le renouveau de la géographie régionale——Le concept de géographie régionale en France et son évolution——」, La recherche géographique française 所収, Comité national français de géographie, 1984. pp. 233～262
- 15) 前掲 (14) p. 243
- 16) 前掲 (14) pp. 243～244
- 17) Revue géographique de l'Est, 1971, 3～4号冒頭
- 18) R. Specklin 「Geographische Studien über das Elsass in den Letzten zwanzig Jahren (1948～1968)」 Regio Basiliensis Heft X/2, 1969, pp. 186～196

- 19) ジュイヤー爾著・大嶽幸彦訳「ヨーロッパの南北軸——大空間の地理——」地人書房, 1977, 305 P.
- 20) E. Juillard 「La “Région,, contributions à une géographie générale des espaces régionaux」Éditions Ophrys, 1974, 231 P.
- 21) J. Tricart 「Les Vosges et la plaine d'Alsace vues du satellite ERTS-1」Ann. de Géographie, N° 462, 1975, pp. 129~173
- 22) R. Kleinschmager et J.-P. Martin 「Recherches sur l'Alsace dans la stratégie des firmes industrielles, Les créations d'Etablissements 1954~1978」Revue géographique de l'Est 1~2, 1981, pp. 81~111
- 23) A. Blanc et al. 「Les régions de l'Est, France de demain 3」P.U.F., 1970, 168P.
- 24) E. Juillard 「L'Alsace et la lorraine, Atlas et géographie de la France moderne」Flammarion, 1977, 287 P.
- 25) E. Juillard 「Pour une théorie de la géographie régionale」La pensée géographique française contemporaine, Mélanges offerts à A. Meynier 所収, Univ. de Haute Bretagne, 1972, pp. 649~662
- 26) G. Wackermann 「Migrations quotidiennes de travail et natures d'espaces en république fédérale d'Allemagne——Approche Méthodologique」Revue géogr. de l'Est 1~2, 1978, pp. 21~33
- 27) M. C. Beyer 「Essai d'étude comparée des formes et tendances de l'organisation de l'espace d'une vingtaine de moyennes et petites villes françaises」Revue géogr. de l'Est 3~4, 1971, pp. 399~414
- 28) H. Nonn 「Les relations de l'Alsace avec les autres espaces économiques français: Un examen préliminaire」Revue géogr. de l'Est 3~4, 1976, pp. 165~181
- 29) アンドレ・チボー・大嶽幸彦抄録「20世紀初頭からのフランスにおける地域空間の分析」地理学評論46巻5号, 1973, 357~359頁
- 30) E. Juillard 「La vie rurale dans la plaine de Basse-Alsace, Essai de géographie sociale」Les Belles Lettres (Paris), 1953, 584 P.
- 31) M. Rochefort 「L'organisation urbaine de l'Alsace」Les Belles Lettres, 1960, 384P.
- 32) 前掲 (10) の著書
- 33) 前掲 (31) の著書
- 34) 前掲 (30) の著書
- 35) R. Schwab 「Un exemple de dynamique régionale: Le cadre spatial de la vie sociale des ruraux de la moyenne-Alsace et son évolution entre 1800 et 1972」Revue géogr. de l'Est 3~4, 1974, pp. 215~243
- 36) H. Nonn 「Strasbourg et sa communauté urbaine, les villes françaises」La Documentation française (Paris), 1982, 200 P.
- 37) A. Traband 「Villes du Rhin, Strasbourg et Mannheim-Ludwigshafen, Etude de géographie comparée」Les Belles Lettres, 1966, 203P.
- 38) M. Décoville-Faller 「La Hardt Haut-rhinoise, Contribution à l'étude d'une région agricole en voie de développement」Istra (Strasbourg), 1968, 150 P.
- 39) Y. Ohdake 「L'évolution des propriétés, des exploitations agricoles et des parcellaires de quelques villages du Kochersberg (1660~1953)」Thèse du 3 iem cycle, Univ. de Strasbourg, 1971, 83 P.

上記の論文は前述のロラン・シュワブの著作（前掲（10））の中で、引用文献の一つになっており（p. 488）、一時期ストラスブール学派の立場に立っていたと見なしても、大きな誤りはないものと思われる。

- 40) 大嶽幸彦「アルザス農村の歴史地理学研究」大明堂, 1979, 163 P.
- 41) A. Frémont 「La région, espace vécu」 P.U.F., 1976, 224 P.
- 42) A. Frémont 「La région, essai sur l'espace vécu」 La pensée géographique française contemporaine, Univ. de Haute Bretagne, 1972, p. 664
- 43) 前掲（42） p. 676
- 44) 前掲（42） pp. 664～666
- 45) 前掲（10）の著書
- 46) R. Brunet 「Pour une théorie de la géographie régionale」 La pensée géographique française contemporaine, Univ. de Haute Bretagne, 1972, p. 653

# A Succession of Area Studies in France

—The Case of Strasbourg School—

Yukihiko OHDAKE

## ABSTRACT

The aims of this research are firstly to outline the general tendency of area studies in France, and secondly to analyse its case in Strasbourg School, by means of classifying the area studies into macro scale and micro scale. Through the process of that analyses, a succession of area studies in France is intended to be explained.

The tradition of area studies in France is still vivid, and the objects of its studies relate to almost all of the world, including not only the research of the small areas in France, but also the west European countries, the developing countries in both North and South Americas, the mediterranean countries, the east European countries and the Union of Soviet Socialist Republics, the tropical countries and the far east countries. So to speak, it can be said that the area studies on macro scale and on micro scale are in coexistence. Though the objects of area studies in the case of Strasbourg School are also the same, its most important characteristics may be pointed out as follows.

The area studies on macro scale of Strasbourg School consist of the researches on German countries, those on areal organization, those on the analyse of photoes sent from Landsat, enlightening books on eastern France. The area studies on micro scale of Strasbourg School are essentially the same as those on macro scale, but the analyses are made more minutely and clarify the changement of the areal organization, with the historical points of view.